

中国魏晉時代の貨幣經濟史に関する研究 —長沙走馬樓呉簡等の出土文字資料を中心に—

柿 沼 陽 平

早稲田大学文学学術院 助教
(現 帝京大学文学部)

緒 言

筆者はこれまで、中国古代において貨幣（経済的流通手段）とそれを中心とする貨幣經濟が具体的にいつどのように展開し、それが当時の社会にいかなる影響を与えたのか、また当時の人びとがそれにどのように対処したのかについて検討してきた。さらにその検討を通じて、中国古代經濟史の時代的变化とその特質を鳥瞰することを試みた。その成果が、拙著『中国古代貨幣經濟史研究』（汲古書院、2011年）である。これをふまえて筆者は現在、戦国秦漢時代に続く魏晉南北朝時代の經濟史について再検討を進めている。

魏晉南北朝時代の經濟については、従来それを自給自足經濟ないし自然經濟とみる説が有力で、一部に南方貨幣經濟の隆盛を説く論者や、錢だけでなく布帛をも貨幣の定義に含めることで当該時期の貨幣經濟を再評価しようとする論者などをも含むものの、総じて詳細・厳密な分析対象とはされてこなかった。だが拙稿「後漢時代における貨幣經濟の展開とその特質」（『史滴』第31号、2009年12月、64-101頁）によれば、前漢時代に続いて後漢時代にも貨幣經濟が存在し、それは前漢時代と異なる時代的特質を有していた。また拙稿「晉代貨幣經濟の構造とその特質」（『東方学』第120輯、2010年）によれば、魏晉時代の晉にも錢や布帛を主たる貨幣とする確固たる貨幣經濟が存在し、それは戦国秦漢貨幣經濟と異質であった。これら一連の研究は、従来自給自足經濟ないし自然經濟が有力とみられてきた魏晉南北朝貨幣經濟史を一新し、全く新しい魏晉南北朝時代史像、ひいては「中国中世史」像（「中世」という位置付けが妥当か否かに関する研究も含む）を描こうというものである。さらに三国時代（曹魏・蜀漢・孫呉）の貨幣經濟に関してもすでに同様の検討結果を得ており、曹魏經濟に関して拙稿「三国時代の曹魏における税制改革と貨幣經濟の質的变化」（『東洋学報』第9巻第3号、2010年12月、1-27頁）、

蜀漢經濟に関して拙稿「蜀漢的軍事最優先型經濟体系」（『史学月刊』2012年第9期、2012年9月、28-42頁）がある。それらによれば、曹魏と蜀漢にも各々独特の貨幣經濟が存在し、曹魏は後漢～西晉の流れの中に位置づけられる經濟構造を有し、蜀漢は軍隊維持を最優先した独特な政治主導型貨幣經濟体制を布いていたと考えられる。では、残る孫呉の經濟は一体いかなるものであったのか。本助成課題はこの点を検討することを目的とし、以て魏晉南北朝貨幣經濟史の体系的理解に資せんとするものである。

実験方法

孫呉貨幣經濟について検討するにあたり、既存の伝世文献には具体的記載がとぼしい。そのため当該問題に関する実証的な先行研究も極めて少ない。だが1996年に中国長沙市で十数万点にのぼる孫呉の文字資料（木簡・竹簡等）が出土した。この所謂「走馬樓呉簡」は、従来の伝世文献研究の欠を補うものと期待されており、現に当該呉簡中には貨幣經濟関連の記載が相当数存する。そこで走馬樓呉簡研究をテコに、まず孫呉貨幣經濟の構造と特質を闡明する。とくに最近ようやく出版された走馬樓呉簡整理組編『長沙走馬樓三国呉簡・竹簡（肆）』（文物出版社、2011年11月）等を使用する。その際に「走馬樓呉簡」の全文データベースを作成する。その上で、最終的に魏晉南北朝貨幣經濟史全体の解明に取り組む。

結果・考察

以上の研究の成果として、拙稿「从走馬樓呉簡看孫呉的中央集権化和軍制」（中国魏晉南北朝史学会・山西大学歴史文化学院編『中国魏晉南北朝史学会第十届年会暨國際學術研討會論文集』北岳文藝出版社、2012年8月、521-532頁）と拙稿「孫呉貨幣經濟的結構和特点」（『中国經濟史研究』2013年第1期、2013年3月、23-43頁）

を刊行できた。両者の一部はすでに助成期間の前に学会報告済だが、まだ随所に再考の余地があった。そこで本助成期間を通じて細部を検討し、最終的に上記2論文を上梓した。もっとも、その中でも第1論文は走馬楼呉簡研究の進展に伴い、付随的に生まれた考えを論文にしたものにすぎず、本助成の中心的成果は第2論文である。そこで以下、第2論文「孫呉貨幣経済的結構和特点」の概要をのべる。

そもそも三国時代の曹魏・蜀漢・孫呉のうち、曹魏では後漢以来の五銖銭が国家的決済手段としての役割を失い、純粋に民間での利便性の高い経済的流通手段(=民間の市などで商品を購入する手段)として生まれ変わった。またその一方で、布帛が新たに国家的決済手段(=国家への納税や国家による支払いの手段)としての役目を果たすようになった。これは銭納入頭を中心とする漢制から戸単位で布帛を納入させる戸調制への税制転換に起因するもので、民は結果的に早く結婚し、男は田畑を耕し、女は布帛をつくり、戸単位納税に備える必要が出てきた。これは、曹魏の版図(=中原)が後漢末に荒廃し、曹魏政府にとって男耕女織的生活の復旧が急務となり、さらに黄巾の乱や董卓の貨幣政策によって銭幣制度が混乱したために生じた現象であった。かかる大転換は、当初は曹魏国内にとどまるものであったが、曹魏が蜀漢を吸収し、西晋に帝位を禅譲し、西晋が孫呉を吸収したために、結局は三国時代以降の貨幣経済全体を方向づけるものとなった。

これに対して曹魏以外の二国(いわゆる蜀漢と孫呉)は地方政権として四川・江南に数十年割據したにとどまり、その意味では「亡国の経済」を形成したにすぎない。だが後述するように、じつはそのような「亡国」に暮らした人びともまた、自分達なりに試行錯誤を重ね、三国間の熾烈な生存競争を勝ち抜こうとしたのであり、それは結果的に独特な地方経済を胚胎した。とくに蜀漢は、一貫して所謂「軍事最優先型経済」を採用し続けた。「軍事最優先型経済」とは、人口の十分の一以上にのぼる吏卒を有する蜀漢がそれらの吏卒を合理的に活用し、計画的軍事都市の漢中を拠点として遠征・拉致・屯田の三位一体的活動を行い、効果的に兵力増強・周辺鎮撫・国威顕揚を実現するための経済体制のことである。本経済体制は、布帛を主たる国家的決済手段、銭を民間の経済的流通手段とする貨幣経済を潤滑油とし、経済と軍事に対する同時的政治支配の上に存立するものであった。蜀漢は軍事経済・戦時経済下の中国古代諸国家の中でもとく

にその特徴が濃厚で、それゆえ筆者はこれを「軍事最優先型経済」と称した。蜀漢が当該経済体制を採用した理由は、蜀漢が弱小国でありながらも、つねに曹魏を意識した戦時的経済体制を営まざるをえなかったからであった。ここに蜀漢経済の構造的特質があった。

では孫呉経済は一体いかなる構造と特質を有していたのか。それを検討したのが、拙稿「孫呉貨幣経済的結構和特点」である。それによると魏・呉・蜀三国の中で、孫呉貨幣経済はじつは最も原形の残る形で漢代貨幣経済を継受したものであった。すなわち孫呉貨幣経済は、銭・布を主たる国家的決済手段および民間経済的流通手段とし、その意味で後漢末期の貨幣経済と一致し、曹魏経済・蜀漢経済とは異なるものであった。しかも孫呉は、漢代以来の銭納入頭税(所謂算賦や口銭)を施行し、さらに巨大な対田租税(穀物+布+銭)を課した。これに対して当時の中原地方は戦乱のため、男耕女織の生産基盤が壊滅し、五銖銭の鑄潰し等も実施された。そのため曹魏は所謂固定的・統一的な戸調制を施行した。かかる戸調制はその後一部改造され、西晋へと受け継がれていった。だが孫呉は銅山等の豊富で多様な自然資源を有し、銭幣経済に中原ほどの壊滅の被害は生じなかった。しかも孫呉は男耕女織政策を施行し続けた。それゆえ孫呉は後漢以来の基本的税制を維持できた。加えて孫呉は、各地の自然環境に応じた柔軟な税制を構築し、それを通じて巨額の戦費に対応した。その一策として孫呉は、銭納入頭税と租税の他に、国家的需要を補完する目的で、多種多様な必要物資の「調(=調発の意。少なくとも一部は官府による物資買い上げ)」を随時実施した。また孫呉には漢代以来の市租などの商業関連税もあった。それは基本的に百銭単位で、漢代市租と一部異なるものの、多くの点で漢制と合致した。その上、孫呉の人口統計は一見すると蜀漢軍事最優先型経済と同じく極端な軍事偏向を有したかのごとくであるが、実際にはその中に非常勤の吏や非常備兵を数多く含み、孫呉の徭役制や兵制はむしろ漢制をほぼ踏襲し、そこに兵戸制を加えたものであった。これは結局、収入面でも支出面でも、孫呉が後漢(とくに後漢末)の制度的継承者であったことを意味する。

ただし上記の孫呉貨幣経済とその制度的背景は、西晋時代になると一新された。西晋は曹魏の禅譲を受けて中原に君臨し、十数年後に孫呉を滅ぼし、天下を統一し、その過程で名目上、全ての支配領域に対して統一的制度を施行していった。かくて孫呉貨幣経済は徐々に「晋化」していった。それは戸調制に代表される西晋税制の浸透

を以て嚆矢とした。だが、郴州晉簡（1—44）には、本来「綿絹」で納めるべき戸調の価値を「布」に換算・表示したことをしめす箇所があり、それは制度と実態のズレをしめすものと推測される。なぜなら既述のごとく、「布」は後漢以来江南地方では非常に多く作られた物財であり、逆に呉簡等には「綿絹」関連の記載が少ないからである。つまり「晉化」がすぐに江南民の実生活に改変を迫ったか否かには検討の余地がある。これが今後の課題となろう。本課題に加え、周辺諸問題を検討し、2013年度以内に数本の論文を上梓する予定である。それらを以て本助成に基づく研究の最終成果としたい。

謝 辞

本研究に助成いただいた公益財団法人三島海雲記念財団ならびに、助成の審査に当たられた先生方に深甚なる謝意を表す。本研究で扱った走馬樓呉簡は現在も全文公表に至っておらず、今後継続的な検討を要する。かかる研究を遂行する上で、本助成は金銭的・精神的に大きな弾みとなった。また窪添慶文先生・關尾史郎先生をはじめとする長沙呉簡研究会の先生方から最先端の呉簡研究を学んだこと、『中国經濟史研究』への論文投稿時に中国社会科学院の封越健研究員に諸点御指導いただいたことを記して、ここに謝する。